

藤並地区遺跡と土生池須恵器窯跡

ふじなみちくいせき

—時代をこえたものづくり—

はぶいけすえきかまあと



土生池須恵器窯跡と窯跡からの出土遺物

集落としての藤並地区遺跡

藤並地区遺跡は、遺跡の中を縦断するように度々発掘調査が行われてきました。その結果、旧石器時代から室町時代という長い時代の遺構・遺物が確認されています。

遺跡のところどころでは、旧石器時代から縄文時代の石器が見つかりました。切ったり突いたりするナイフ型石器、皮の加工に用いる搔器、石器の加工に用いる敲石・台石など様々な用途のものが発見されています。さらに、石器づくりの過程でできる石核も見つかっていることから、石器の生産が藤並地区遺跡で行われていたことが明らかになっています。

弥生時代には、遺構・遺物ともに減少するため、集落は北側にある旧吉備中学校校庭遺跡・田殿尾中遺跡など川沿いの平地へ移っていったと考えられています。奈良時代・平安時代になると、須恵器・瓦器などを伴った掘立柱建物跡や溝などがみつき、再び集落として利用されるようになります。

発掘調査で鎌倉時代の鋤による耕作痕が見つかることから、そのころから遺跡周辺は水田として開発されたようです。鎌倉時代以降の集落は、天満Ⅰ遺跡などに移っていったと考えられています。

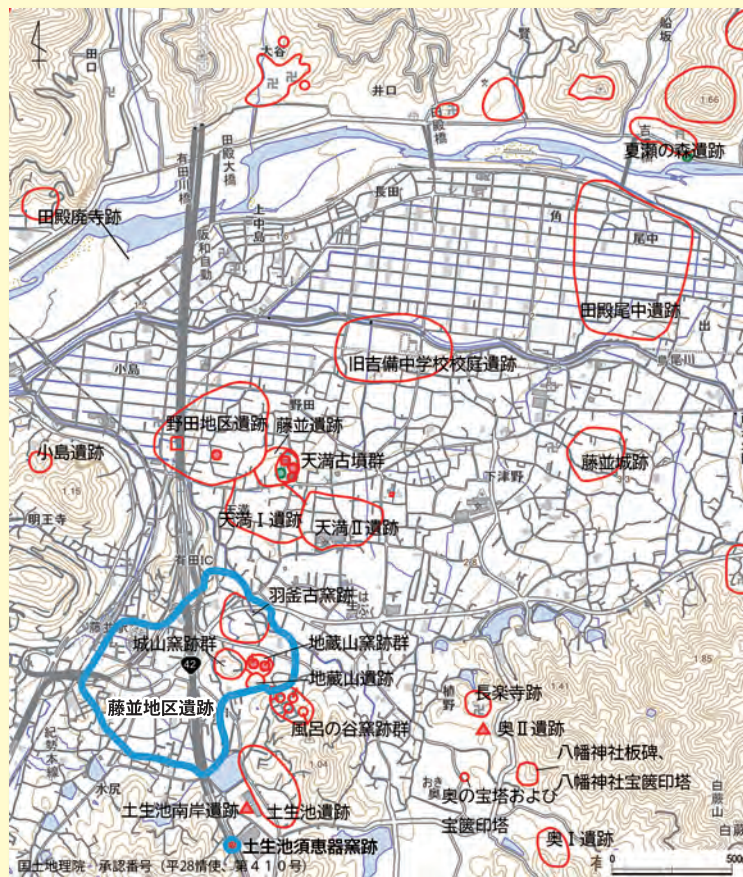


奈良時代の掘立柱建物跡

編集・発行元：公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1
TEL：073-472-3710 FAX：073-474-2270
発行日：2022 年 3 月 4 日 印刷：初田印刷株式会社



現在の藤並地区遺跡周辺（赤線○が 07-Ⅲ区）



藤並地区遺跡と周辺遺跡



出土した石器（有田川町教育委員会提供）

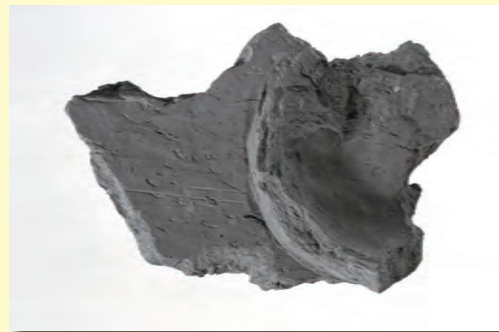
2022

公益財団法人 和歌山県文化財センター

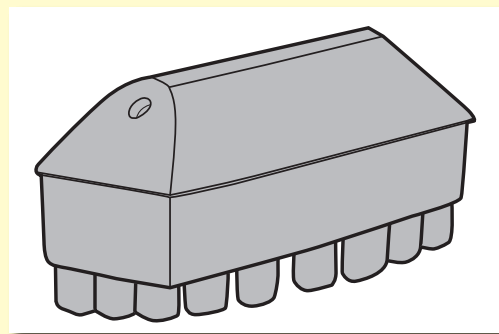
藤並地域の焼き物生産

時代から室町時代の集落遺跡です。遺跡周辺では良質な粘土が採れたため、丘陵のゆるやかな斜面を利用した窯が多く造られ、古墳時代より須恵器が生産されるようになります。そののちには瓦などの焼き物も作られています。

藤並地区遺跡と土生池須恵器窯跡の発掘調査により、この地域では古墳時代から近代までの長い間、焼き物生産という、土地柄を生かしたもののづくりが行われていたことがわかりました。今回は、藤並地区遺跡と土生池須恵器窯跡の焼き物生産についてみていきましょう。



出土した陶棺脚部の破片



陶棺の模式図（原図：河内一浩氏）



瓦器椀

瓦器は、焼くときに表面に炭素を吸着させるため、黒っぽい色をしていることが特徴です。これらは近畿地方を中心とした西日本で作られますが、地域によって縁のかたちや底の磨き方などの作り方に特徴があることが分かっています。

和歌山県では主に紀北・紀中地域で瓦器が多く見つかります。県内でも旧郡単位で瓦器の作り方が異なっており、各地で瓦器の生産が行われていたと考えられています。

藤並地区遺跡は、有田川町の土生・明王寺・水尻・天満に広がる旧石器時代と奈良



藤並地区遺跡の位置

とうかん 陶棺

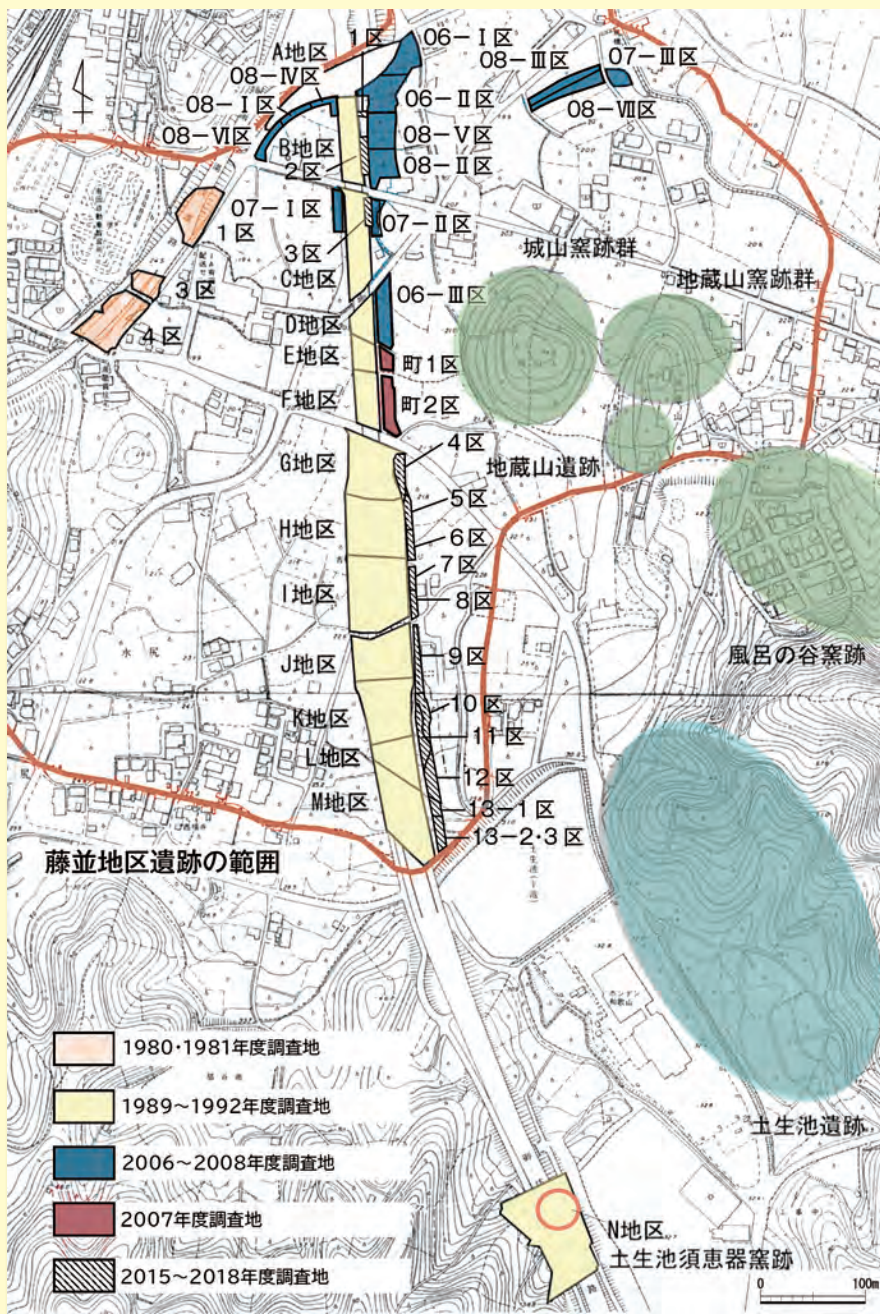
藤並地区遺跡では、1990年の調査にて和歌山県ではじめて陶棺が出土しました。

陶棺は、主に古墳時代後期から見られる焼き物でできた棺で、複数の脚をもつことが特徴です。焼き方の違い等から須恵質（灰白色）のものと土師質（赤茶色）のものに大別されます。藤並地区遺跡から出土した陶棺は一部分しか見つかっていませんが、須恵質で左の模式図のような全体像であったと考えられます。

和歌山県で陶棺が見つかった遺跡は、藤並地区遺跡のほかに和歌山市の平井遺跡、岩出市の根来寺遺跡がありますが、平井遺跡では近くに窯跡が見つかり、根来寺遺跡でも近くに窯跡があったと推定されていることから、こうした窯で陶棺が焼かれていたと考えられています。

がき 瓦器

藤並地区遺跡でも多く見つかる遺物のひとつに瓦器があります。瓦器は、平安時代後期ごろからみられる土器で、椀や皿など日常的なものに用いられてき



藤並地区遺跡・土生池須恵器窯跡におけるこれまでの調査



土生池須恵器窯跡（赤線○が窯跡本体）

はぶいけす えき かまあと 土生池須恵器窯跡

藤並地区遺跡の周辺では須恵器窯跡や瓦窯跡が多く見つかります。このうち土生池須恵器窯跡は発掘調査によって窯の全体が明らかになりました。

この窯跡は奈良時代の須恵器窯で、発掘調査により3つの窯跡と須恵器を焼くときに発生した灰や失敗作などを捨てた灰原が見つかりました。削平された窯跡の上に別の窯跡が造られおり、3つの窯は同時に使用されたのではなく、同じ場所に複数回造られていたことがわかりました。また、一つの窯で床や壁を修理した形跡があり、窯を繰り返し修理しながら須恵器を焼いていたとみられます。窯跡が見つかった場所の丘陵の傾斜などが、窯を造るのに適していたのでしょう。



須恵器壺



水煙を模した須恵器



灰原



灰原の断面。須恵器片が捨てられているのがわかる

す え き 須恵器

古墳時代中ごろには、窯を使って高温で土器を焼くという新技術が朝鮮半島より伝わりました。須恵器はこの新技術で作られた焼き物であり、灰色で硬く、水漏れがしにくいことが特徴です。

土生池須恵器窯跡でつくられていた須恵器には、こうした貯蔵に用いる壺や甕、食器として用いる杯などがあります。こうした日常生活に用いるものが多くを占めていましたが、中には、寺院の仏塔に用いられる水煙を模したものなど、普段の生活ではあまり使われないものも作られていました。

近代の瓦生産

近代の藤並地区遺跡周辺では、瓦の生産が行われていました。藤並地区遺跡から、瓦づくりに使われたとみられる粘土採掘坑が見つかり、この地域の良質な粘土を生かしたもののづくりが、古墳時代や古代だけではなく近代まで長い期間行われていたことが分かります。